

埼玉労山アンケートのまとめ 2025.6

「埼玉県連盟の活動に関するアンケート」へのご協力ありがとうございました。アンケートは、15 山岳会、総数 154 枚寄せられ、予定数 100 枚を大きく上回る数を集めることができました。アンケート結果は別紙集計表のとおりです。また、理事会三役会では、このアンケート結果を分析し、以下の「アンケートのまとめ」を作成いたしました。埼玉県連盟の今後の活動を考える際の参考にいただければ幸いです。

2025 年 6 月 25 日

埼玉県勤労者山岳連盟理事会三役会

①では、埼玉労山の活動として是非やってみたい、やってもらいたいものを 33 の選択肢の中から 10 個選んでもらった。33 の選択肢は、分かりやすさを考えて、活動全般と〇〇委員会関連とにグループ分けをして表示したが、グループごとにいくつか選んでもらうのではなく、全体から 10 とした。これは、どんな分野の活動を望んでいる会員が多いのかを知りたかったためだ。

会員の要望が多岐にわたることを反映してか、何かのグループや何かの活動に回答が集中することはなく、活動ごとの獲得ポイントも広くばらける結果となったが、40 ポイント以上獲得したのは以下の 10 のものであった。

- ・鍋交流など飲食中心の交流企画
- ・登山家・専門家を呼んでの講演会
- ・救急救命講習
- ・山岳気象講座、山のお天気教室
- ・登山学校の充実・継続
- ・雪上訓練・クライミング講習会など、野外での登山技術系講習会
- ・バスハイクなどの柔らかか目の企画
- ・地図読み講習
- ・クリーンハイク・植樹など、環境保護活動
- ・県内の登山道や避難小屋を整備する活動

これは、「埼玉労山の活動としてやってみたいもの」という条件で選んでもらったもので、各山岳会では実施しにくいものが選ばれたということはあると思うが、鍋交流やバスハイクなど気軽なイベントから、各種講習会や講演会など学習的なもの、またクリーンハイクなど自然保護に関わるものまで、本当に多岐にわたる活動を希望する人がいることがわかった。おそらくそれは、会員の活動意欲の広さと深さを示すものと考えられ、今後も多岐にわたる連盟活動を展開していく必要性を示しているものと思われる。

②は埼玉労山に入るプラスは何かを問う質問だったが、断トツに 1 位だったのが、「遭難対策基金に入れる」(108 ポイント)で、続いて、「自分たちではできない講習が受け

られる」(48 ポイント)、「救助隊があって万一の時安心」(41 ポイント)であった。モンベルやヤマケイなど次々と新しい山岳保険が登場する中ではあるが、埼玉労山会員の遭難対策基金への期待と信頼が揺らいでいないことがわかる。

③は、あえて埼玉労山に入るデメリットはあるとすれば何なのかを問う質問であったが、「デメリットは特に感じない」(25 ポイント)を超えて、「連盟の会議負担が重い」(59 ポイント)「連盟費など費用負担が重い」(41 ポイント)「会の中心メンバーを理事などに取られる」(32 ポイント)を挙げる人が多かったことは重く受け止めなければならないだろう。とりわけ、会議の負担をどう減らしていくかという課題は、待ったなしの段階に来ているものと考えなければならないであろう。

④は「労山に加入すると、会議等の負担が多い割に得るものがない」という意見に対する賛否を問うものであった。これは、連盟を脱退する選択をした山岳会から実際に寄せられた意見、脱退理由であったが、これに「少しそう思う」(56 ポイント)人が「そうはあまり感じない」(47 ポイント)人より多い点には注意が必要だろう。おそらく多くの会員が悩みながらも「少しそう思う」と答えてしまう現状は、会執行部からの脱退提案があれば反対しないことにつながりかねないわけで、組織的にはきわめて危ない状況にあると理解しなければならないだろう。

⑤は理事になりたいかかなりたくないかとその理由についての質問である。具体的な要請もないのに、「理事になってもよい」と答える人が多くないことはある意味当然のことだが、ここでは、「なりたくない」理由に「会議の時間など時間的負担が多い」(89 ポイント)と答える人がきわめて多い点に注意を払いたい。山登りという比較的時間が必要な趣味に魅せられた人にとって、山登りの時間を捻出するためには常に仕事や家庭との調整が必要で、そのことに日々頭を悩ませている中で、新たな時間的負担が生じるであろう理事への就任はできれば避けたい選択であることは理解できる。これまでの労山活動がそれを超えるような使命感を持つ人たちによって支えられてきたことは素晴らしい伝統として語り継がれていくべきだとしても、これから若いメンバーをたくさん迎えて、世代交代を図っていかなければならない時に、このあたりの思いを受け止めずして労山の未来像は描けないことは確認しておきたい。

⑥は埼玉労山の役職としてある「理事」と「専門委員」のどちらを希望するかをあえて問うた質問である。理事の全体性と専門委員の専門性を明示して選んでもらった場合、「どちらも絶対に嫌だ」(47 ポイント)という選択肢を入れても、「専門委員の方が良い」(47 ポイント)を選ぶ人が同数いらっしまった(ちなみに「理事の方が良い」は9 ポイント)。この事実は、理事になりたくないと答える人が圧倒的に多い中にある意味驚きであ

ったが、「専門委員」という形であれば多くの人が埼玉労山の活動に力を貸してくれる可能性を示しており、今後の組織運営の上で大いに参考になる結果であった。

⑦は総会や評議会など埼玉労山の会議は、様々な観点から考えて、年に 3 回程度必要だと考えるか、年に 1 度で良いとするかについての考えを尋ねたものだが、「年に 1 度」(91 ポイント)を希望する意見が、「年に 3 回程度」(11 ポイント)を大きく引き離して多数であった。メール活用ができる時代の流れの中で、会議の負担を減らす方向への希望が圧倒的に多いことを示すもので、現在、総会、評議会、代表者意見交換会と年に 3 回行われている埼玉労山の会議の在り方を見直していく必要があるだろう。

⑧は、理事長など連盟活動上の負担が特に多い人に、謝金や活動補助金を出すことへの賛否を問うたものである。連盟活動は、これまで、講習などの際に講師に講師謝金を渡すことはあっても、誰かの活動全体に対して活動補助金を出すことはなかっただけに、ある意味大転換となる変更であるが、「とても良い提案で賛成だ」(43 ポイント)、「検討に値する提案だ」(80 ポイント)が「どちらかといえば反対」(6 ポイント)、「絶対反対」(2 ポイント)を大きく上回り、圧倒的な賛成の意思が示された形だ。これは、男女、年齢、活動年数、メリット・デメリットをどう考えるか、理事になりたい・なりたくないの気持ちなど、あらゆることに関わらない意見であり、世代交代と連盟活動の継続という課題を考えたときに、謝金問題の検討が避けては通れないものとする人が多いことを示している。今後の改革はこの意見を踏まえて構想されることになるだろう。

⑨は、「若者を労山活動に迎え入れるために必要だと思うこと」について尋ねたものだ。回答は、「登山技術向上のための機会を増やす」(67 ポイント)、「例会をたのしいものに」(51 ポイント)、「会議負担を減らす」(45 ポイント)、「役員の若返り」(30 ポイント)、「費用負担を減らす」(22 ポイント)であった。票が割れる形となったのは、選択肢のどれもが若者を迎え入れるのに必要だと感じられているからだろう。費用負担を減らしてあげたいが、「それほど高くないので減らすのはもう限界だろう」とか、「役員の若返りは若い人が入って来やすい会を作る特効薬だとしても、現実的にはすぐには難しい」などの理由からか、これらの選択肢を選ぶ人がやや少なかったが、そもそも 5 つの選択肢から若者を迎え入れるために必要なことを選ばせるのは無理な面があったのだと考える。これは、どれかを選ぶというより、すべてをやらなければ若者は入って来ない、そういう性質のものだったと考える必要があるのだろう。ある意味で、私たちの組織改革の一番のテーマは「若者をどうしたら労山に迎え入れることができるか、そして、若者をどうしたら連盟の役員に迎え入れることができるか」だと考える。そのために、できることはすべてやろう。それでも若者の壁は厚いのかもしれない。しかし、その壁を壊せなければ、労山の明日がないことは間違いない。